

モンテーニュ、ツヴァイクと自己叙述のダイナミズム

—『エッセー』の著者についてのエッセイをめぐる随想的試論—

杉山 有紀子

プロローグ——未完のモンテーニュ

1942年2月21日、ブラジル・ペトロポリス。この地に亡命してきていたベルリンのジャーナリスト、エルンスト・フェーダーは妻と共に、近くに住む友人シュテファン・ツヴァイク夫妻の家へ招かれていた¹。

ツヴァイクが4巻本の『エッセー』を返してよこす。彼はここ数か月の間モンテーニュ論に取り組んでいたが、手元に2巻本の抜粋しかなかったため、フェーダーが自分の全集を貸していたのだった。

「完全版が手に入ったのですか？」

「ええ」と相手は曖昧に答える。

この晩、ツヴァイクは微笑すらほとんど見せなかったという。「それまで以上に暗い影が彼の上にかかっているのを感じた」とフェーダーは回想している。夫妻がこの家で自ら命を絶つ前の日の晩、「魅惑的な夏の夜」²のことだった。2月23日の朝、「自由な意志と明晰な意識をもって人生に別れを告げる」³という文面の遺書(Declaração)と共に遺された『モンテーニュ』*Montaigne*の原稿は、未完のままだった。

断片として残された作品には他にバルザック伝⁴や長編小説『クラリッサ』*Clarissa*等があるが、これらの大規模な計画の筆を止めて、最晩年のツヴァイクは『モンテーニュ』に取り組んでいた。『昨日の世界』*Die Welt von Gestern*、『チェスの話』*Schachnovelle*⁵（いずれも1942年、没後出版）といった自身の代表作となる作品を書き上げる中、最期の日々に

¹ 以下はエルンスト・フェーダーの回想による。Vgl. Dines, Alberto: *Tod im Paradies. Die Tragödie des Stefan Zweig. Aus dem Portugiesischen von Marlen Eckl.* Frankfurt am Main (Edition Büchergilde) 2006, S. 575ff.

² Ebd., S. 578.

³ *Declaração von Stefan Zweig, 22. Februar 1942.* In: Zweig, Stefan: *Briefe 1932-1942.* Hrsg. von Knut Beck, Jeffrey B. Berlin und Natascha Weschenbach-Feggeler. Frankfurt am Main (S. Fischer Verlag) 1998, S. 345.

⁴ ツヴァイクには他に『三人の巨匠』*Drei Meister* (1920年)に収められたバルザック伝があり、これと区別するため晩年のバルザック伝断片は著者自身の表現に従い『大バルザック』*Der große Balzac*とも呼ばれる。

⁵ 『チェスの話』の最終稿は上に述べた『エッセー』返却と同日、1942年2月21日に出版社宛に発送されている。Vgl. Zweig, Stefan: *Schachnovelle. Kommentierte Ausgabe.* Stuttgart (Reclam) 2013, S. 81 (Editorische Notiz vom Herausgeber Klemens Renoldner).

モンテーニュについて書くとは——そして書き終えないとは——彼にとってどのようなことだったのだろうか。

1 『モンテーニュ』の成立と二つの版

ツヴァイクがモンテーニュについて書き始めたのは、本人の語るところではある偶然がきっかけであった。彼は1941年9月からペトロポリスのある邸宅を借りて住んでいたが、その家の地下室でたまたま2巻本の『エッセー』を発見したのだという⁶。ただブラジルの状況をよく知るアルベルト・ディネスによれば、これは当時のこの家の状態からして現実にはあり得ないことで、運命的な出会いを強調しようとしたツヴァイクの誇張ではないかとしている⁷。いずれにせよ、亡命下でとりわけ強められた共感の内に着手されたモンテーニュ論は、その後フェーダーに借りた完全版の『エッセー』、さらに資料としてマーヴィン・ローウェンタル Marvin Lowenthal の『ミシェル・ド・モンテーニュの自伝』*The Autobiography of Michel de Montaigne* (1935年)、及びフォルテユナ・ストロウスキ Fortunat Strowski (当時リオの大学で教鞭を執っており、ツヴァイクは直接相談もしている) の『モンテーニュ——その生涯の公的及び私的側面』*Montaigne. Sa vie publique et privée* (1938年) 等を用い、1941年11月から12月頃に集中的に書き進められたとみられる。著者の死後、この伝記的エッセイは遺稿の中に断片として発見された。タイプライターで清書された原稿に、ツヴァイクが手書きで補足や修正を加えたものだった。

戦後、『モンテーニュ』はツヴァイクの遺稿整理を委ねられた友人リヒャルト・フリーデンタルの編集により、1960年のエッセイ集『ヨーロッパの遺産』*Europäisches Erbe* の一編として公刊された⁸。このフリーデンタル版はタイプ部分及び手書きの書き込みの一部に基づいているが、その加筆部分の取舍選択のほか、語句や語順等にも独自の判断でかなり手を加え、一つの完結したエッセイの形を整えている。それに対し1990年発行のクヌート・ベック編の全集には、断片の状態であるオリジナルのタイプ原稿をありのままに再現するものが収められた⁹。すなわち原文に忠実であるのはもちろんのこと、タイプ原稿における語句や引用の欠落、暫定的に書かれて推敲が予定されていたとみられる箇所等が注

⁶ Vgl. Prater, Donald: Stefan Zweig. Das Leben eines Ungeduldigen. Aus dem Englischen von Annelie Hohenemser. München/Wien (Carl Hanser Verlag) 1981, S. 433f.

⁷ Dines, a. a. O., S. 490.

⁸ Zweig, Stefan: *Europäisches Erbe*. Hrsg. von Richard Friedenthal. Frankfurt am Main (S. Fischer Verlag) 1960, S. 7-81. 以下同書からの引用は Fr と略記し、頁数のみを記す。例：Fr16

⁹ Zweig, Stefan: *Zeiten und Schicksale. Aufsätze und Vorträge aus den Jahren 1902-1942. Gesammelte Werke in Einzelbänden*. Hrsg. von Knut Beck. Frankfurt am Main (S. Fischer Verlag) 1990, S. 468-556. 以下同書からの引用は GW と略記し、頁数のみを記す。例：GW525

積付きで明記されている。ただこの版では手書きの書き込みは原則として顧慮されていない。

問題はどちらの版を用いるべきかということである。ある程度確定的と思われるタイプ部分だけにに基づき、かつその中でも未完の部分の判別可能にしている全集版か、あるいは手書きの加筆も含めて作者の意図をより多く取り入れた上で、曲がりなりにも完成形を示しているフリーデンタール版か。どちらがより「正統」な版なのだろうか？ どちらがより「作者の意志に忠実」と言えるのだろうか、あるいはより「本来の姿」に近いのだろうか？

奇しくも同様の問題は作品の主人公であるモンテーニュの『エッセー』にも存在する。一般に『エッセー』においては三つのバージョンが区別される。1580年に第1巻と第2巻が初めて公刊された後、加筆修正を経た既存の2巻及び書き下ろしの第3巻をまとめた第2版が1588年に出版された。この第2版に対してモンテーニュはさらに書き込みによる改訂を行い、その作業は1592年に彼が死去するまで続いた。こうして彼の死後に残されたいわゆる「ボルドー本」が最終かつ最も大部の『エッセー』の形態となっている。今日発行される『エッセー』は基本的にこのボルドー本に基づいているが、邦訳を含め、何らかの記号によって第1版から、あるいは第2版から存在する部分、そしてボルドー本で初めて書かれた箇所が区別できるように編集されているものも多い。なぜなら『エッセー』に対してモンテーニュの行った加筆修正は「より良い」作品として完成させるためのものではなく、過去の思考過程をその都度新たに捉え直し文脈を再形成していくダイナミックな作業だったからだ。モンテーニュ自身も加筆作業について「私は付け加えはするが訂正はしない」という有名なモットーに続いて以下のように述べている。

(II) 私の理解力は常に前へ進むわけではなく、後ろへも下がる。私は自分の思い付きについて、二番目や三番目だからといって最初のものよりも、現在のものだからといって過去のものよりも疑わないというようなことはない。我々は他人を矯正するとき同様、自分に対してもしばしば愚かな矯正をするものだ。(III) 私の最初の出版は1580年だった。それから長い時間が経って私も年を取ったが、賢くなったということはこれっぽっちもない。この時の私とあの時の私はまさに別の二つのものである。だがどちらがより優れているかということは私には全く言うことができない。¹⁰

従ってボルドー本が「作者の最終的意志」であるとか、あるいは逆に初版こそが「オリジナル」であるといった固定的判断には意味がない。「私自身が私の本の題材」¹¹であると

¹⁰ Montaigne, Michel de: Essais III-9 « De la Vanité ». In: Montaigne, Michel de: Essais. Livre Troisième, Chapitres IX à XIII. Texte établi et présenté par Jean Plattard. Paris, Edition Denard Roches, 1932, p. 34. なお(II)は1588年の第2版、(III)はボルドー本の追記を指す。

¹¹ Montaigne: Essais. « Au Lecteur ». In: Essais. Livre Premier, Chapitres I à XV. 1931, p. 7.

ころの『エッセー』の諸版は、そのままモンテーニュの「私」の変化・発展を映しているのであり、その不断のダイナミズムを各版の狭間に読み取っていくことこそが肝要だからである¹²。

ツヴァイクの『モンテーニュ』もいったんタイプ原稿として整えられたものに加筆修正がなされることによって、『エッセー』ほどではないにしても無視できない変容を蒙っている。その過程はオリジナルの原稿はもちろんのこと、編集に際し手書きの書き込みを一部取り入れているフリーデンタール版と、そうでない全集版、また断片としての状態を表に出さない前者と、それを明示する後者の違いを通していくらか窺い知ることができる。そしてここでもやはり、どちらか一方が「決定稿」として排他的に用いられるべきではなく、まさに両者の違いこそが多くを物語るのだ。本論執筆にあたってはさらに双方のもととなったタイプ原稿の写しも一部参照することができた¹³。これら三つのテキストを適宜比較しながら、『エッセー』の作者についてのツヴァイクのエッセイが孕む多層的なダイナミズムを観察していくこととしたい。

2 自己叙述としての『エッセー』と『モンテーニュ』

2.1 『昨日の世界』の補遺としての自伝性

「読者よ、ここにあるのは誠意の書物だ」¹⁴という宣言でもって『エッセー』は始まっている。この序文「読者へ」において、モンテーニュは彼の「エッセー」＝試みの目指すところをあくまでも私的なものと規定する。親しい者たちが彼の死後も、彼という人間やその思考のありようをこの書物の内に見出してほしい。それゆえ彼がここに示す自己像は虚飾や気取りのないあるがままの姿であり、「世の中の礼儀が許す程度に」欠点も含め描き出されたものである。「そういうわけで、読者よ、私自身が私の本の題材なのだ」。

『エッセー』を特徴づけるのは奔放に織りなされる多彩で哲学的なテーマ、古今の詩句や逸話の縦横な引用、そして「私」という一人称による主観的で自由な語りである。ツヴァイクも再三指摘するように、モンテーニュの中心的意図は「私」について考え尽くし、自己を知り、そのあるがままの自己を呈示することである。しかしそれは単にミシェル・ド・

¹² ツヴァイクが用いた『エッセー』が各版を区別したものであったかは不明である。ただ少なくとも、作家や芸術家の手稿収集を趣味としその観察によって多くのことを読み取れると信じていた彼が、モンテーニュの手書きによる『エッセー』改訂作業に無関心であったとは考えにくい。

¹³ オリジナルのタイプ原稿の所在は現在不明であるが、バックによる全集版編集の際にS. フィッシャー社が作成したコピーを、ザルツブルク大学の文学資料室(Literaturarchiv Salzburg)が所蔵している。本論文執筆にあたってはその写しを参照した。

¹⁴ Cf. Montaigne: Essais. « Au Lecteur ». In: Essais. Livre Premier, Chapitres I à XV. p. 7.

モンテーニュひとりに限定された関心ではなく、究極的にはその例を通じて「人間そのもの」を理解し、普遍的なものを見出していこうというものであったとされる。

こうした『エッセー』的特徴をツヴァイクのモンテーニュ論に探すとすると、それはどの程度成功するだろうか。ツヴァイクがモンテーニュという人物に対する自らの捉え方を記した第1章に目を向けてみよう。この部分は比較的早い時期から「はじめに(Einleitung)」として執筆が始められていたこともあり、タイプ原稿への加筆修正は個々の語句等の変更にとどまるため、フリーデンタール版と全集版の間にも大きな違いはない。

まず、執筆の動機が少なからず(『エッセー』のそれ以上に)私的なものであることは十分に読み取れる。このエッセイは構想当初の草稿においては『モンテーニュへの感謝』*Dank an Montaigne* と題されていた¹⁵。著者の生前に公刊されず、またそう望んだとしても可能性としては不透明な状況にあって、あくまで私的な「慰め」として書かれたという側面が大きいことがうかがえる。そして事実『モンテーニュ』は、16世紀の著述家ミシェル・ド・モンテーニュについての伝記として読むならば些か不完全なものである。それはある人間の生涯における様々な事実から総体的な人物像を構成することを目指してはいない。ツヴァイクのそれ以前の伝記作品も多かれ少なかれそうなのだが、ここでのモンテーニュ像は特に一面的であり、そしてそれは意識的な描き方である。他の「もっと穏やかな時代」にはモンテーニュの宗教観、哲学的立場、教育論などが論じられてきた。しかし、と彼は述べる。

私が今日モンテーニュにおいて心を動かされ、惹かれるのはこのことだけである：彼が我々のそれに似た時代の中であっていかにかに自分を内面的に自由にしたか、そして我々が彼を読むことによって、彼の例によっていかにかに我々自身を強めることができるかということである。私は彼をこの世の全ての自由な人間(*homme libre*)の父祖、守護者にして友、自分自身を全ての人間及び全ての事物に対して守るといふ、この新しくも永遠なる学問の教師とみなす。(強調引用者；Fr15, GW477)

このエッセイの主眼がモンテーニュの生涯と人物像の歴史的に適切な伝達ではなく、彼の生涯を「自由」の実践のモデルとして示す点にあるということが明示されている。さらにそのモンテーニュ像があくまでも「私の」「今日の」感情という強い主観性のもとに語られるということも宣言される。実際にツヴァイクの『モンテーニュ』は、多彩な読書体験に対するモンテーニュ自らの反応を自在に綴る『エッセー』の文体を模すと言うほどではないにしても、対象に対する書き手の個人的な向き合い方を少しも隠さない。デイヴィッド・ターナーが指摘するように、『モンテーニュ』はこの *ich* という一人称単数の視点を直に用

¹⁵ Vgl. GW565 (Nachbemerkungen des Herausgebers von Knut Beck).

いている点において、同様に16世紀の宗教闘争、宗教戦争の時代を扱い「自伝的試み」と呼びうる1930年代の評伝、『ロッテルダムのエラスムスの勝利と悲劇』 *Triumph und Tragik des Erasmus von Rotterdam* (1934年) 及び『カステリョ対カルヴァン、あるいは良心対権力』 *Castellio gegen Calvin oder ein Gewissen gegen die Gewalt* (1936年) よりもいっそう個人的色彩の強い自己叙述である¹⁶。これらのテキストで扱われるデジデリウス・エラスムス及びセバ스티アン・カステリョも、モンテーニュと近い時期に宗教的暴力と対峙したヒューマニストであり、『モンテーニュ』でも彼らの名は言及されている。しかしこれら二つの伝記においてはまだ、1930年代当時のナチズム及び反ナチス運動に対する態度表明という意味での公的要素が皆無ではなく¹⁷、またターナーも指摘する通り、内容に著者自身の立場の反映が認められるとしても文体において著者の「私」が前面に出ることはない。これに対し『モンテーニュ』第1章を一読して目に付くのは、一人称単数の多用による著者自身の「私」への強い言及であり、非常に個人的な同一化、共感の表現である。そこでは「私にとってモンテーニュとはどのような存在か」ということが繰り返し語られ、それは時に熱狂的な調子すら帯びる：「誰かが呼吸している、誰かが私と共に生きている、ひとりの見知らぬ者が私に向かって歩み寄り、それはもはや見知らぬ者ではなく、友のように私に近しい誰かとなる」(Fr17, GW479)。これほど頻繁に、また直接的に著者の「私」が語る例はツヴァイクの伝記作品でも珍しい。あるいはこうした一人称単数の積極的な使用は、飾りのない自己の感性の表出である『エッセー』の文体に影響されたものと考えてよいかもしれない——「彼(モンテーニュ)が自分でものしてみたラテン語の詩句は常に、直前に読んだばかりのものの模倣に過ぎないということを認めるのだった」(Fr45, GW513)ということがモンテーニュとツヴァイクの間にも起こっていて不思議ではない。

しかもターナーがさらに述べるように、『モンテーニュ』で描かれるこのモラリストの生涯そのものも、相当の部分において著者自身のそれに重ね合わせられる¹⁸。最も直接的かつ頻繁に言及されるのは時代的な類比、すなわち自らを正義と信じる狂信者たちによる戦争と殺戮、及びヒューマニズムの隆盛から野蛮への転落(z. B. Fr9f., GW472f.)という点における、モンテーニュの時代と20世紀との重ね合わせである。だがそれだけでなく、もっと個人的な点でも「実のところあたかも自分自身の人生の歩みを語っているかのような印象を呼び起こす」¹⁹記述は少なくない。例えばユダヤ系の血筋による融和的、仲介者的特

¹⁶ Vgl. Turner, David: *Zweig und Montaigne: Ein Dialogisieren mit dem Bleistift in der Hand?* In: Stefan Zweig. *Exil und Suche nach dem Weltfrieden*. Hrsg. von Mark H. Gelber und Klaus Zelewitz. Riverside (Ariadne Press) 1995, S. 263-276, hier S. 265f.

¹⁷ 『エラスムス』等とツヴァイクの反ナチズム運動に対する立場との関係については拙論：シュテファン・ツヴァイク『ロッテルダムのエラスムスの勝利と悲劇』試論—自由のイデオロギー化とヒューマニズムの問題をめぐって—(『詩・言語』第77号、東京大学大学院人文社会系研究科ドイツ語ドイツ文学研究会 2013年1月、15-40頁) 参照。

¹⁸ Vgl. Turner, a. a. O., S. 266.

¹⁹ Ebd.

性(Fr24, GW487)、「成り上がり」家庭の二代目以降に特徴的とされる教養への関心(Fr20f., GW482f.)、あるいは学校の管理教育に対する反発(Fr30ff., GW494ff.)、読書体験や作家としての自意識(Fr44ff., GW512ff.)、結婚・家庭生活への不満(Fr64, GW535f.)等である。

このことは、『モンテーニュ』の少し前に書かれた自伝的テキスト『昨日の世界』において、著者の家族などの私生活や個人的な経験についての記述がきわめて少ないこととの比較においても興味深い。上に挙げた諸点は、「一時代全体の運命」²⁰の物語である『昨日の世界』において全く、あるいは一般的な形でしか触れられなかったプライベートな事柄への示唆を含み、著者の生涯の最終盤における自伝的記述として、『昨日の世界』以上に個人的、私的な性格を『モンテーニュ』に与えている。特に最後の点、結婚と家庭の問題は、時期的にも生々しい実体験を背景に持っている。というのも1934年のロンドン移住以来、ツヴァイク自身が家庭生活において大きな危機を体験しているからだ——亡命に伴うザルツブルクの自宅売却に反対する妻フリデリケ及びその娘たちとの衝突、ロンドンで出会った若い秘書ロッテ・アルトマンとの愛人関係、それに続くフリデリケとの離婚とロッテとの再婚。私生活におけるこれら一連のトラブルは、亡命後の心身ともに最も負担の大きい時期に起こったもので、ツヴァイクに与えた精神的影響は到底無視できないものであるが、公的な自伝とも言うべき『昨日の世界』ではほとんど触れられない、いわば抑圧された一面である²¹。さらに、ツヴァイクはヨーロッパの破滅を決定づけた（と彼がみなすところの）第二次世界大戦の開戦をもってこの回想録を締めくくり、ヨーロッパを離れた後の自身の亡命生活については何も語っていない。そのように自伝としては欠落の多い『昨日の世界』の補遺、あるいはエピローグのような役割を、ある意味で『モンテーニュ』が担っていると言えるのではないだろうか。

2.2 「内面の自由」理念の個人的性質

もちろん表向きの（そして実際に中心的な）コンセプトは、モンテーニュを「この世の全ての自由な人間の父祖、守護者にして友」、「内面の自由」理念の師として描き出すことである。しかし既に見たように、単なる思想的近似、あるいは再三強調されている時代状

²⁰ Zweig, Stefan: Die Welt von Gestern. Erinnerungen eines Europäers. Gesammelte Werke in Einzelbänden. Hrsg. von Knut Beck. Frankfurt am Main (S. Fischer Verlag) 2007, S. 7.

²¹ 現実のモンテーニュは、確かに妻との感情的交流は乏しかったものの、妻に家政や社交の切り盛りを委ねることでむしろ煩わしい仕事から解放され、精神活動に専念することができた（モンテーニュの妻については例えば以下を参照：オーロット、ロベール『モンテーニュとエッセー』。荒木昭太郎訳、白水社文庫クセジュ 1992. 18頁。及びFriedenthal, Richard: Entdecker des Ich. Montaigne, Pascal, Diderot. München (R. Piper & CO Verlag) 1969, S. 41ff.）。ツヴァイクがモンテーニュのイタリア旅行の動機について「行間を読まなければならない」(Fr64, GW535)と述べて結婚生活というものの単調さ、束縛感を強調していることは、意識的あるいは無意識的な誘導であり、その背後に自身との私的同一化への欲求があったことは十分に考えられる。

況の類似性だけでは説明しきれない個人的な類縁性が、ツヴァイクと彼の語るモンテーニュとの間にはある。そしてさらに、この内面の自由という理念の性質そのものが、そのような個人的な関わり方、つまり一般的でない「私」の立場から語られるということを要請するのではないだろうか。この理念を純粹に理念的、抽象的な形で捉えることは、ツヴァイクの定義するその本質上不可能なはずなのである。

内面の自由を守るモンテーニュのこの闘いは、恐らく精神的人間の闘った最も意識的で先鋭的なものであつただろうが、外的には少しも熱情的なもの、英雄的なものを持っていない。自身の言葉をもって『人類の自由』のために闘った詩人や思想家の列にモンテーニュを加えるのはかなり無理がある。[……] 内面の自由のように私的なもの(etwas so Persönliches wie innere Freiheit)を他の人間たちに、ましてや大衆に伝えようなどという考えを彼が真に受けることはなかつただろうし、職業的な世界改良家、理論家、信念を売物にする連中(Überzeugungsverschleißer)を彼は魂の奥底から憎んでいた。自分自身の内で内的独立を守ることだけでもどれほど途方もない課題であるかということを知っていたのだ。それゆえ彼の闘争は専ら防衛に、ゲーテが「城塞(Zitadelle)」と呼んだところの、何びとも他人の侵入を許さない最奥の砦の防御に限定された。(Fr15f., GW477f.)

ここで自由の個人的(persönlich)な性質は政治的革命や思想運動に対比されている。これは、まさに「人類の自由」のための戦争が行われている時代に書かれたということを考えればきわめて興味深い事実である。ツヴァイクがモンテーニュの生き方に見出そうとしている「内面の自由」とは、民主国家において法が保障し、全体主義が剥奪するところの一般的な権利、言い換えれば革命であれ社会変革であれ何らかの公的闘争によって獲得されるような自由ではない。それは彼の表現を借りれば「自分自身であり続け、自分自身の生を生きること(sich seine Persönlichkeit zu bewahren und sein eigenes Leben zu leben)」(Fr56, GW527)によってのみ守られるものである。「内面の自由を守る闘い」が必要とするのはただ一つ、すなわちいかなる外的圧力、習慣、ドグマ、システムにも精神を従属させないこと、自らを捧げ尽くしてしまわないこと、である。その際法、政治、慣習等における「外的」な自由が保障されているか否かは問題ではない、あるいはまさにその意味での自由が奪われているからこそ、政治的「権利」を超えた人間の究極的な自由の可能性である内面的自由を守り抜くことの意義が真に示される。こうした極度に内面化された自由理念は、2.1で言及した1930年代の伝記的テキスト、『エラスムス』及び『カステリョ』においても、

共産主義的反ファシズム運動に取り込まれてイデオロギー化された政治的「自由」に対比する形で既に提示されていたものである²²。

上に引用した『モンテーニュ』の一節はこの思考をさらに進め、自由を「人類」のために英雄的に勝ち取るような性質のものではなく、それどころか他人に向かって伝え広めるべき思想としてでもなく、ただ個人としての自分自身の生き方のみが示し得るもの、いわば「私の自由」としてしか語り得ないものとして捉える。そうした「内面の自由」が、言ってみれば『モンテーニュ』においてはそれが内容のみならずテキストそれ自身の、対象に対し徹底的に「個人的」に向き合うという態度を通して実践されているとすることができる。ツヴァイクは『エッセー』の思想を評して「彼の驚嘆すべき点、また慈悲深い点は、彼が決してこの問いを命令形に変えなかったこと、この『私はいかに生きるべきか』という問いを『あなたはどのように生きるべきか』という命令にしなかったことである。[……]自由に思考されたことは、決して他者の自由を制限することがないのだ」(Fr55f., GW525f.)と述べているが、彼自身もまた『モンテーニュ』において「モンテーニュとはこのような人物だ」と断じるのではなく、あくまでも「私はモンテーニュをこのような存在と捉える」という個人的視点を、意図的に出発点に据えているかのようである。このエッセイが書かれた1941年、ファシズムとそれに対する戦いが既に全世界を憎悪と殺戮で覆い、「自由」が戦争の旗印とならざるを得ない時代への深い絶望の中で、「内面の自由」はツヴァイクにとって、暴力に結びつくことのない自由理念の最後の可能性であった。その究極的な自由の本質が、このエッセイの内容だけでなく語り方、つまりモンテーニュという「自由の人(homme libre)」の生涯に対する「個人的」な叙述のあり方を通して表出しているのである。

3 モンテーニュ論の『エッセー』的ダイナミズム

3.1 生涯を語るというダイナミズム

しかしそうした *homme libre*、自由理念の体現者としてのモンテーニュは、決して静的な観察対象としてのみ捉えられるものではない。前章で見たような対象との個人的な関わり方、そして自伝的要素——『エッセー』的な自己叙述としてのあり方というのは、むしろ本質的に固定化を拒むものではないだろうか。前述のようにモンテーニュは1580年に『エッセー』初版が出版された後も改訂を繰り返している。『エッセー』がその時々、常に絶えざる

²² 拙論：シュテファン・ツヴァイク『ロッテルダムのエラスムスの勝利と悲劇』試論（前掲誌）参照。イデオロギー化した自由に対してツヴァイクが擁護しようとする個人的自由の理念について、ここで詳述することはできないが、簡潔に言えば（とりわけ Kommunismus と強く結びついたところの）反ファシズム陣営が、イデオロギー的闘争の戦列の前に「自由」の美名を掲げようとするならば、それは個人の自由に対する新たな暴力に他ならないということである。

変化の内にある「語る主体」と密接に結びついているからこそ、テキストはこうした終わりなき更新を要請する。多くの追記や修正の後ツヴァイクの『モンテーニュ』がついに完成されることがなかったのは、確かに著者の——自由意志によるとはいえ——死という外的、偶然的理由からである。しかし同時にこの伝記的エッセイがある意味で彼の『エッセー』であるとすれば、それはモンテーニュ自身におけると同様の、未完の自己叙述のプロセスを示すものともみなし得るのではないか。

ツヴァイクの『モンテーニュ』に自己叙述のダイナミズムを与えている要因は二つに分けて考えることができる。一つは内容上の、もう一つは形態上すなわちテキスト間のそれである。内容におけるダイナミズムは、このテキストが（ともかく一定程度は）伝記的エッセイの形を取っていることに見出される。決して網羅的な生涯の記述ではないものの、モンテーニュ像は固定された肖像としてではなく歴史的に、動きの中で描き出される。このことが意味するのは、この人物によって体現されるどころの「内面の自由」という理念もまた静的な対象としてではなく、彼の生涯の展開を通して歴史的発展の中で捉えられているということである。

第1章でツヴァイクはモンテーニュについて語るにあたっての着目点及び立脚点について、既に指摘したように一人称を用いて語っているが、その中でまず彼は自分がモンテーニュに関心を持った経緯を述べている。というより正確には、なぜ今まで関心を持たなかったかということ。彼によればそれはモンテーニュの中庸、寛容といった特性が若者の心を惹くような主題でなかったという理由ばかりではない。

モンテーニュがあらゆる時代を通して最も断固としたその闘士であったところの個人の自由というものは、我々1900年ごろの人間にとって、本当にいまだに頑固な擁護を必要とするように思われたであろうか？ そうしたもの全てはとうに自明のものとなっただろうか、独裁や隷属からとうに解放された人類の、法と習慣によって保障された所有物となっただろうか？ 我々の口における呼吸のように、心臓の鼓動のように、自分自身の生命、思考に対する権利、それを制限なく言葉と文字で言い表す権利は、当たり前我々のものとなっているように見えたのだ。
(Fr9, GW470)

それゆえ当時の自分たちには、モンテーニュが国境、国家権力、戦争、独裁的イデオロギー等々、「自分たちがとうに壊してしまった鎖を無意味に揺すっている」ように見えたのだとツヴァイクは述べる、「運命によってそれが我々に対して、もっと硬く恐ろしいものとして鍛え直されていたことに気付かずに。[……]というのも我々は人生の真の本質的な価値を常にあまりに遅く認識するのだ。過ぎ去って初めて若さの価値を、失われて初めて健

康の価値を、そして奪われそうになるときあるいは奪われたとき初めて、自由という我々の魂の最も貴い本質の価値を知るのである」(Ebd.)。

『モンテーニュ』の執筆を通じたツヴァイクのモンテーニュとの関わりは、彼自身の自由理念との関わりと一体のものともみなされる。それゆえこの人物を通じた自由理念の主題化はある種の歴史性を伴う。同時期に書かれたエッセイ『この暗いひと時に』*In dieser dunklen Stunde* (1941年5月)にも、「自由の危機において初めて自由の価値を知る」という同様の事態が次のような表現で述べられている。

だが友よ、この戦慄すべき人類の野蛮への後退を前にして我々がいかに信じる心を、楽観を失ったとしても、この試練の中で得たものが一つある。私が思うに、我々の誰もが今日、精神の自由の必要性和神聖さに対する新たな、今までにまして熱情的な意識を持つようになってきている。なぜなら人生の最も神聖な価値においてこそ、奇妙なことが起こるものなのだ。それが我々のものである限り、我々はそれを忘れている。人生の憂いなき時にはそれにほとんど注意を払うことがない、明るい日中に星々に気が付かないように。永遠なる星々がいかに見事に我々の頭上に輝いているかを認識するには、常にまず暗くならなければならない。それと同様に、呼吸が我々の身体から切り離せないように自由というものが我々の魂から切り離せないものであるということ、これを我々が認識するためには、まずこの暗いひと時が、もしかしたら歴史上最も暗いひと時が、我々の上に訪れなければならなかったのだ。²³

こうした、ナチス政権成立という歴史的状況と、そこでのツヴァイク自身の体験における「自由」の現実的危機によって喚起された反省的回顧が『モンテーニュ』の叙述の基盤となっている。言い換えるとモンテーニュの生涯を語ることは、それに(内容的に)重ね合わせられたツヴァイク自身の生涯を語ることであり、同時に、その生涯を通して彼が常に取り組んできた自由という理念の歴史を辿ることでもある。ツヴァイクはモンテーニュの生涯をその様々な局面、すなわち学校の抑圧、公職や家業による束縛、時代の迷妄との対峙、家庭の軋轢からの逃避、そして最後の政治への「仲介者的」参与と死への準備といった諸段階における、「いかにして自由であるか(wie bleibe ich frei?)」(Fr14, GW476)という

²³ Zweig, Stefan: *In dieser dunklen Stunde*. Erstmals in ›Aufbau‹, New York 16. Mai 1941. In: *Die schlaflose Welt. Aufsätze und Vorträge aus den Jahren 1909-1941. Gesammelte Werke in Einzelbänden*. Hrsg. von Knut Beck. Frankfurt am Main (S. Fischer Verlag) 1983, S. 276-278, hier S. 277f. なおここに再び、2.2で述べた『モンテーニュ』の中心的主題である「内面の自由」の本質を見て取ることができる。それは政治的自由(=太陽)とは別の、その光が失われるときに初めて存在・価値を明らかにする(=星)のような性質のものである。そしてそれは外的な抑圧や独裁(=夜、闇)によって奪われる「権利」などではなく、それでもなお失われない、「魂から切り離せない」もの、闇を通して光り輝くものとして捉えられている。

問いの絶えざる探求として描いていく。そしてその背後にはツヴァイク自身の同じ探究の歴史を——19世紀市民社会の自由主義を基盤としつつ、第一次世界大戦とナショナリズムによる精神的抑圧に対する独立の模索、さらに全体主義的暴力との対峙に至るまで、その都度新たにされてきた「自由」の私的发展史を見て取ることができるのだ。

3.2 テキスト間のダイナミズム

3.2.1 「自由」と「死」をめぐる転回

もう一つの、テキスト間のダイナミズムは、本論第1章で述べた『モンテーニュ』の複数の異なったバージョンの比較によって明らかになる。ツヴァイクの残した草稿は、『エッセー』のいわゆるボルドー本がそうであったように、未完の思考・編集の過程を示している。それは『エッセー』からの関連箇所のメモ、語句の修正、ローウェンタールの著作からの英語による間接引用(GW493f.)、推敲・追記を前提にして余白を残したり箇条書きにしてある箇所(GW505)等を含む。前述のように全集版はこのタイプ原稿に基づいているが、そこに加えられている手書きの書き込みは基本的に顧慮されていない。これに対しフリーデンタール版は手書きの加筆の一部を含めた草稿全体に基づき、編者の判断で引用等も加えて一定のまとまった形を提示しているが、ただし書き込みのうちフランス語の引用など大半は採用されていないと見られる。タイプ原稿全体の読解整理は現在のところまだ行われていないが、必要に応じてオリジナルを参照しつつ、出版されている二つの版を比べてみることで、『モンテーニュ』成立のダイナミズムを垣間見ることができる。

ここでは特に重要な例として、『モンテーニュ』第7章から、モンテーニュが求めたとされる様々な「自由」についての「表(Tabelle)」を、フリーデンタール版と全集版で比較してみたい。下線部は相違点を示す。

〈全集 (ベック) 版〉	〈フリーデンタール版〉
Frei von Eitelkeit und Stolz, dies vielleicht das Schwerste.	Freisein von Eitelkeit und Stolz, dies vielleicht das Schwerste.
	<u>Sich nicht überheben.</u>
Frei von Furcht und Hoffnung	Freisein von Furcht und Hoffnung, <u>Glauben und Aberglauben.</u> Frei von Überzeugung und
Frei von Überzeugungen und Parteien	Parteien.
	<u>Freisein von Gewohnheiten: »Die Gewohnheit verbirgt uns das wahre Gesicht der Dinge. «</u>
Frei von Ambitionen und jeder Form von Gier, <u>frei gleich seinem eigenen Spiegelbild zu leben</u>	Frei von Ambitionen und jeder Form von Gier: <u>»Die Ruhmsucht ist die nutzloseste, wertloseste</u>

Frei von Geld und jeder Form von Gier und concupiscence

Frei von Familie und Umgebung

Frei von Fanatismus, jeder Form starrer Meinung, vom Glauben an absolute Werte (GW529)

虚栄と誇りからの自由、これが恐らく最も難しい。

恐れと希望からの自由

信念と党派からの自由

野心及びあらゆる形の欲望からの自由、自分の鏡像と同じように自由に生きること

金銭及びあらゆる形の欲望と煩惱からの自由

家族及び周囲のものからの自由

狂信、あらゆる形の硬直した意見、絶対的価値への信仰からの自由

und falscheste Münze, die in Umlauf ist. «

Frei von Familie und Umgebung. Frei von Fanatismus: »jedes Land glaubt, die vollkommenste Religion« zu besitzen, in allen Dingen an der Spitze zu stehen. Frei sein vom Schicksal. Wir sind seine Herren. Wir geben den Dingen Farbe und Gesicht.

Und die letzte Freiheit: vom Tode. Das Leben hängt vom Willen anderer ab, der Tod von unserem Willen: »La plus volontaire mortest la plus belle. « (Fr57f.)

虚栄と誇りからの自由、これが恐らく最も難しい。

思い上がらないこと。

恐れと希望、信仰と迷信からの自由、信念と党派からの自由。

習慣からの自由:「習慣は我々から物の真の姿を隠す」。

野心及びあらゆる形の欲望からの自由:「名声欲は流通している中で最も使い物にならない、価値のない、偽りの貨幣である」。

家族及び周囲のものからの自由。狂信からの自由:「どの国も最も完全な宗教」を持っていると、あらゆる事柄において頂点にあると思っている。運命からの自由。我々はその主人である。我々が事物に色と形を与えるのだ。

そして最後の自由:死からの自由。生は他人の意志に左右されるが、死は我々の意志次第である:「最も自発的な死は最も美しい」。

一見してわかるように、フリーデントール版には全集版にない部分が多く含まれているが、これは主に手書きの加筆を取り入れたか否かの違いによる。草稿の当該箇所には、全集版が示すような箇条書きの項目（全集では1行おきになっているが、実際には数行分の空白がある）のみがタイプ打ちされ、その間に手書きで大量の書き込みが加えられている。

『エッセー』からの関連箇所のメモがその大半を占めるが、ドイツ語による補足等もあり、フリーデンタールはそれらの一部のみを本文に組み入れている。全集版に欠けていてフリーデンタール版に含まれているのは主にそのような箇所である²⁴。

これを前提として見比べてみると、項目に合う『エッセー』からの引用が加えられた部分のほかに、項目そのものが書き加えられている箇所がいくつかある。中でも特に目を引くのは最後の「運命」と「死」の部分である。二つの項目はオリジナルの草稿では別々の場所に書き込まれており、上のようないくつかの「自由」の項目の一つではあると見られるものの、いずれも「運命」「死」という単語のみで「～からの自由(Frei von)」という部分は草稿にはない。フリーデンタールはそれ以前の項目に合わせて「～からの自由」の形で補っているが、特に後者に関しては内容的にはむしろ「死への自由」あるいは「死という自由」と言うべきものである。最後に引用されているモンテーニュの原文は『エッセー』第2巻第3章「ケオス島の習慣について」の一節「最も自発的な死は最も美しい。生は他人の、死は我々の意志にかかっている(La plus volontaire mort, c'est la plus belle. La vie despend de la volonté d'autrui, la mort de la nostre.)」²⁵で、この引用元は上記の箇所への手書きのメモに加え、さらに別紙にタイプされたものが原稿に挿入されている。

この「運命」と「死」に関する加筆は、自由というテーマにまつわるこの「表」全体の意味をも大きく左右する。全集版から受け取れるのは事物や煩惱、狭隘な思想に束縛されない生き方の指針のようなもの——そして実際の『エッセー』の主眼はむしろそちらにあるのだが——であるのに対し、フリーデンタール版はこの二つの項目を含むことによって一気にその射程を広げ、生そして死をも包み込む、人間存在の根本に触れるものとしての「自由」を強く打ち出してくる。『モンテーニュ』の中心的主題である自由という理念さえも、テキスト間の動的発展の中でその意味を新たに展開させているのだ。確かに、友人であったフリーデンタールの多少恣意的でもある補足は、ツヴァイクの「ヒューマニスト」的イメージを強調するものと取れなくもないが、草稿中の **Tod** という語が丸で囲まれ、**letzte Freiheit** と二重下線が付けられていることを見ても、著者自身にとっても思い入れの深い箇所であったことは確かだろう²⁶。

²⁴ 逆に、全集版にあってフリーデンタール版にない箇所もいくつかあるが、これは手書きでそのように修正されていてフリーデンタールがそれに従ったというわけではなく、彼独自の判断で（引用箇所との重複等の理由で）削除したと思われる。また上の引用で **Freisein** となっている部分は、原稿ではいずれも **Frei** であり、フリーデンタールが改変したものとみられるがその意図は不明である。

²⁵ Montaigne: Essais II-3 « Coustume de l'Isle de Cea ». In: Essais. Livre Second, Chapitres I à XIII. 1931, p. 31.

²⁶ 原稿ではさらにこの箇所の「死」という語のすぐ後に「生きることは屈従である **Vivre est Servir**」という言葉が書き込まれているが、これも『エッセー』の同じ箇所からの引用で、原文は「生きること、それは屈従である、もし死ぬ自由がないのであれば(**Le vivre, c'est servir, si la liberté de mourir en est à dire**)」(ibid., p. 32.)である。この最後の書き込みはフリーデンタール版にも取り入れられていない。

そしてこれらがタイプ原稿完成後の加筆部分であるという事実の持つ意味は決して小さくない。それはすなわち、ツヴァイクの実際の「自発的な」死に限りなく近い時期にこれらの書き込みがなされたということであり、逆に言えば彼が自死へと傾いていった時期に、モンテーニュが語った(あるいは少なくともツヴァイクがそのように読み取った)「死」と「自由」への強い関心を抱いていたということである。ともあれ、以上のような形で内容だけでなく加筆の段階の違いにも目を向けることによって、我々は「自発的な死」あるいは「死への／死という自由」という考えがツヴァイクの中でモンテーニュといかに強く結びついていたかということをやよりいっそう明らかに知ることができるのである。

3.2.2 異国での死について

もう一つ、『モンテーニュ』第8章から例を挙げておこう。これも「死」、それも「異国での死」に関する記述である。健康状態が万全でない中で旅に出ようとするモンテーニュの、周囲の憂慮に対する反応を記している。フリーデンタール版は以下のようにになっている。

そして同様に彼は、異国で死ぬことになるかもしれないという懸念に対する答えも持っている。そんなことを恐れなければならないとすれば、彼はそもそも自分のモンテーニュ教区の境、ましてやフランスの国境の外へはほとんど出られないことになるだろう。死というものはどこにでもあり、それに会うのは基本的にベッドの上よりは馬上の方が好ましい。

まことのコスモポリタンとしてそれは彼にとってどうでもいいことなのだ(Als dem rechten Kosmopoliten ist es ihm gleichgültig)。(下線は引用者による；Fr69)

下線部は全集版(GW541f.)で欠落している部分で、『エッセー』第3巻9章「むなしさについて」からの引用である。原文は「もし私が生まれた土地以外の場所で死ぬことを恐れるならば、親しい者から離れては安らかに死ねないと思うならば、私はフランスの外へ出ることもほとんどできないだろうし、自分の小教区を出ることすら恐ろしくなるだろう。[……]私にとっては死というのはどこであつても同じものだ。しかしもし選ばなければならないとしたら、私としてはベッドの上よりは馬上で、家の外で親しい者から離れて死ぬ方がよいと思う」²⁷となっている。タイプ原稿ではこの引用にあたる部分は数行分の空白になっており、全集の編者ベックはフリーデンタールが手書きの書き込みをもとに上のように補足したものと推測しているが、原稿を見る限り少なくとも当該箇所への直接の記入は見ら

²⁷ Montaigne: Essais III-9 « De la Vanité ». In: Essais. Livre Troisième, Chapitres IX à XIII. p. 54.

れない。ツヴァイクがここに何らかの引用を入れるつもりであったのは確かだが、フリーデンタールが上のように補足した根拠は不明である²⁸。

しかし、ここに『エッセー』のどの箇所が挿入されるはずであったかというのは、この部分の理解に際しては二次的な問題である。仮にフリーデンタールの補足通り、ツヴァイクがこの空白に上記の箇所を当てはめるつもりであったとしても、あるいは別の箇所が想定されていたとしても、彼はその『エッセー』の一節について語ることを目的としてこの部分を書いたのではないことがタイプ原稿から明らかだからだ。フリーデンタール版では注釈なしに引用が加えられたためにはっきりしなくなっているが、執筆上の重点は先に書かれていた「異国で死ぬことはコスモポリタンにとって問題ではない」という部分の方にあり、実際のモンテーニュの言葉はいわばそれに合わせて引き出されたものにすぎない。

従って『モンテーニュ』のこの箇所の主題は故郷を離れること、そしてその状態で死を迎えることに対するコスモポリタンとしての前向きな受容である。しかし『昨日の世界』においてはまだ、ツヴァイクはオーストリア国籍を失ったことに対する苦しみを抑えきれない自分を「かつてのコスモポリタン(*der einstige Kosmopolit*)」と呼び、現実の故郷喪失において痛感したコスモポリタニズムの限界を以下のような絶望的な調子で告白していた。

私が半世紀にわたって自分の心臓を、コスモポリタンの(*weltbürgerlich*)に、世界市民(*citoyen du monde*)のそれとして鼓動するようにと躑んできたのも役に立たなかった。否、自分のパスポートを失ったその日、ひとは故郷と共に境界線の中の一つの土地以上のものを失うのだということを、私は58歳にして悟ったのだった。²⁹

長期にわたる亡命生活の中で若き日からのコスモポリタンとしての誇りさえ失いつつあったツヴァイクは、旅するモンテーニュの死に対する軽やかな悟りの内に「まことのコスモポリタン」としてのあるべき姿を再び見出した。『エッセー』引用に続く最後の一文は、

²⁸ この箇所に限らず、全体としてフリーデンタールの編集方針は明らかでない。上記の『エッセー』引用に関しては、ツヴァイクの原稿において当該箇所以外のどこかに何らかの手がかりがあったのかもしれないが、フリーデンタール独自の判断で挿入されたということも十分に考えられる。彼は後に『自我の発見者たち——モンテーニュ・パスカル・ディドロ』*Entdecker des Ich. Montaigne, Pascal, Diderot* (1969)のモンテーニュの章で自ら『エッセー』のこの箇所に言及しているが、そこで彼はやはりこの一節を「旅の途中で死ぬかもしれない」という周囲の憂慮に対するモンテーニュの応答という形で引用している(Friedenthal, a. a. O., S. 90f.)。モンテーニュの原文ではもう少し曖昧で、少し前に「その年で長旅をしては帰ってこれなくなるかもしれないと言われるが、帰ってくることなど考えていない」という意味のことを述べるにとどまる(cf. Montaigne: *Essais* III-9 « De la Vanité ». In: *Essais. Livre Troisième, Chapitres IX à XIII*, p. 53)。ツヴァイクの原文に『エッセー』からの引用を補うとすれば確かにこの箇所はよく当てはまるように思われる一方、そこにフリーデンタール自身の『エッセー』解釈が入り込んでいる可能性も考慮する必要がある。

²⁹ Zweig, Stefan: *Die Welt von Gestern*. S. 466. 1938年のナチスドイツによるオーストリア併合をめぐる述懐の一部。

モンテーニュの考えにかこつけてはいるが、書き手自身の言葉でもあることが直接話法によって示唆されている。あるいはそれは絶望の淵に立っていた『昨日の世界』の自分自身に対する、ある覚悟を込めた応答であり、現実の「異国での死」を前にしての慰めでもあったのかもしれない。

3.3.3 未完のダイナミズム

以上は二つの出版稿及びオリジナルのタイプ原稿の比較が可能にする『モンテーニュ』解釈のほんの一例に過ぎない。『モンテーニュ』が『昨日の世界』のエピローグ的意義を持ち得るということを2.1で指摘したが、具体的な意味で自伝的と言える内容を別にしても、このエッセイがツヴァイクの文字通り「最後の日々」の思考のありようを垣間見せるものであることは疑いない。しかしそれを辿っていくことは、タイプ部分のみを抜き出した全集版はもとより、フリーデンタールの手で整えられた形においても見えなくなってしまうテキストの多層的なあり方を、両者の比較及びオリジナル原稿の観察を通して探っていく作業によってのみ可能となる。我々はそれがまさに「未完」であったことこそを心に留めなければならないのだ。ボルドー本を読み解いた16世紀の編者たちのように、フリーデンタールも友人の未完の遺稿を整理し、彼なりに一つの完成形にまとめ上げた。しかし作者の手になる言葉をどこまで取り入れるかという点においては編者自身によって線引きがなされる他なく、注釈もない中でテキスト内の断層を見て取ることは困難である。少なくとも全集の刊行以前の研究は専らこのフリーデンタール版に依ってきたわけだが、それがあくまでも暫定的なもの、最後まで動き続けていた未完の草稿から派生した仮の姿にすぎないという事実が十分に意識されてきたとは言えない。一方、全集版の編集に際し草稿中のタイプされた部分のみを用い、そこへの書き込みを原則として顧慮しないという決断を下したベックは、それがどのような事情によるものであったにせよ、結果としてフリーデンタールがある程度尊重しようとしたところの「著者の最期の意志」を切り落とすことにならざるを得ないという事実は自覚していたことだろう。

いずれにしてもそうした編集によって「決定稿」を生み出すことはできない。『エッセー』のように複数の執筆段階を弁別可能にした編集は可能であろうし、また今後大いに望まれるものであるが、それでも読み手の側がその狭間に生じているダイナミズムに意識的に目を向けることなしには、自己叙述としてのこのテキストの意義を十全に理解することは叶わない。『エッセー』の三つの版がそうであるように、テキストの内包する多層性の狭間にこそ、自己叙述における未完のダイナミズムという本質が宿る。「何もののもとにも立ち止まらないという彼 [モンテーニュ] の態度が、彼に先へ先へと進むことを強いる。[……] 彼は全てであって無であり、常に別の者であって常に同じ一人の者なのだ (Sein

Bei-nichts-stehen- bleiben zwingt ihn, immer weiter zu gehen. [...] Er ist alles und nichts, immer ein anderer und immer derselbe) (Fr50, GW519f.)

エピローグ——死による完結？

ツヴァイクが『エッセー』の中から、自らの最後の行為に対する後押しを（恐らくはモンテーニュ自身の意図に反して）受け取ってしまったことは恐らく事実だろう³⁰——「この随筆家 [=モンテーニュ] が、ほんの少量だけ適切なタイミングで摂るべき危険な薬であるということをつヴァイクは知らされなかったのだ」³¹。しかしあるいはモンテーニュを読むこと以上に「危険」であったのは、この人物の生涯を通したもう一つの、ツヴァイク自身の自己叙述の試み、つまり「書く」行為の方であったと言えるのかもしれない。「内面の自由」の私的发展史としての『モンテーニュ』を「書き上げる」ことは、とりもなおさずこの理念と共に生きてきた自らの生涯の「完結」へと向かうことに結び付く。そしてこうした自己叙述におけるダイナミズムの最も特徴的な点は、その相互的作用にある。すなわち変遷を続ける自己に応じて記述が変化するのみならず、逆もまた必然的に生じるということだ。『エッセー』序文においてモンテーニュは既にそれが「完全に裸」の自己ではないことを示唆しているし³²、そもそも言語によって捉えられる自己というものは本質的に対他ので一般的なものにすぎない。真の、ただ一人の「私」そのものはどこまでも言語の普遍性から逃れ出ていくものであり、そのようにして言語との間に絶えず生じ続けるずれは「私」の側をも常に新たに作り変えていく³³。「私」を語ることは同時に、そのように語られるべき「私」を生み出すことでもあるのだ。こうした自己叙述における相互的な生成変化の中で見るならば、自殺を決意した人間が「最も自発的な死は最も美しい」と記したの

³⁰ Vgl. Turner, a. a. O., S. 272f.

³¹ Dines, a. a. O., S. 490.

³² Cf. Montaigne: Essais. « Au Lecteur ». p. 7.

³³ クリスティアン・モーザーはモンテーニュの「自己叙述」について、それが実は無数の古典の引用という文化的伝統を通した形でのみ可能になっていることを指摘し、そうした伝統及び教育のような外的なものによって刻印された「自己の内の他者」を再び外化していく試みとして『エッセー』を捉える。自己叙述は「伝統」の中で形成されてきた自己を他者として捉え直す作業であるが、しかしその際自己は再び「伝統」すなわち書物との関係の中で語られざるを得ないのである(vgl. Moser, Christian: Buchgestützte Subjektivität. Literarische Formen der Selbstsorge und der Selbstthermeneutik von Platon bis Montaigne. Tübingen (Max Niemeyer Verlag) 2006, S. 734-742)。このモーザーの論に倣うならば、ツヴァイクが彼自身の自己叙述を、ヒューマニズム的伝統の原点とも言うべきモンテーニュを通した形で綴っていることも、彼自身の自己、とりわけその中心的要素であった「自由」の理念をモンテーニュという他者への投影という形で外化し捉え直していく作業と解釈することができるだろう。モーザーの示す構図は、主たる関心事としての「私」と、それを言語化する場としての過去の対象とが『エッセー』的自己叙述の語りの中で連鎖的に変遷していくプロセスについての一つの重要な解釈可能性を示すものと言える。

か、それとも言葉の方がそれを書いた者を死へと動かしたのか、いったい誰が断定できよう。あるいはそれらは同じ一つのことではないのだろうか。

フリーデントールは自身の編集によるツヴァイクの『モンテーニュ』を世に出した9年後、自らミシェル・ド・モンテーニュについてのエッセイを発表しているが、その中で彼は『エッセー』とその著者について次のように述べている。

不満足(unwillig)な著者は死ぬまで書くことをやめなかった。道は決して終わることがなかったのだ。最後の書き込みをした欄外に「終わり(FINIS)」の文字を書き加えたのはただ死のみであった。³⁴

この言葉はそのまま『モンテーニュ』とその著者ツヴァイクにも当てはまる。フリーデントールに倣って、ツヴァイクの「(自発的な) 死」によって彼の『モンテーニュ』は初めて完成されたのだ、と言えば些か修辭が過ぎるかもしれない。しかし変転を続ける「私」を語る言葉がまた際限なく「私」を動かし、再び新たな言葉呼び起こす、この相互的にしてとどまるところを知らないダイナミズムの「終わり」は、文字通り死のほかどこにも見出され得ない。

友人の皆さんにご挨拶いたします！ 皆さんが長い夜の後になお夜明けを目にすることが出来ますように。あまりにも性急な私はお先にまいります(Ich, allzu Ungeduldiger, gehe ihnen voraus)。³⁵

モンテーニュ同様「決断を嫌う」(Fr38, GW504)人間だったはずのツヴァイクが、最後の決意を記した遺書の結びにおいて「私」に与えた形容は「あまりにも性急な者(allzu Ungeduldiger)」であった。この表現にもやはり、書く主体によって動かされていくと同時に書く者を動かしていく力、自己叙述の相互的なダイナミズムが働いていたであろうことはもはや言うまでもない。

³⁴ Friedenthal, a. a. O., S. 77.

³⁵ Declaração von Zweig. In: Zweig, Stefan: Briefe 1932-1942. S. 345.

Montaigne und Zweig: die Dynamik der Selbstdarstellung

Ein essayistischer Versuch zum Essay über den Autor der *Essais*

Yukiko SUGIYAMA

Stefan Zweigs *Montaigne* (1941-42, Fragment) ist ein unvollendeter biographischer Essay, den er kurz vor seinem Freitod in Brasilien verfasste. In diesem Aufsatz wird das Werk in der dynamischen Entwicklung des Textes als eine persönliche Selbstdarstellung Zweigs interpretiert.

Analog zu Michel de Montaigne, der seine *Essais* für ein persönliches Ziel schrieb und darin sein unaffektiertes Selbst darzustellen versuchte, kann man Zweigs *Montaigne*-Essay in mehreren Hinsichten „persönlich“ nennen. Erstens ist das Motiv des Verfassens dieses Essays höchst privat, wie es dessen erster Arbeitstitel *Dank an Montaigne* offenbart. Zweig erklärt im ersten Kapitel, dass er das Bild der Hauptperson nach seinem subjektiven Interesse zeichne, und zwar hauptsächlich als das Modell des wahrhaft „freien“ Lebens. Dabei benutzt er häufig die erste Person Singular, damit er seine Sympathie und Identifizierung mit Montaigne auch auf sprachlicher Basis explizit machen kann. Ferner zeigt sich der *Montaigne*-Essay inhaltlich an manchen Stellen weniger biographisch als vielmehr autobiographisch; im Vergleich mit Zweigs sogenannter Autobiographie *Die Welt von Gestern* verrät *Montaigne* zwar mittelbar, aber mehr Persönliches und Privates aus dem Leben des Autors, darunter z. B. die Probleme des Familienlebens. Und diese persönliche Erzählart entspringt nicht nur dem privaten Motiv, sondern ferner der Idee der „inneren Freiheit“, die Zweig durch diesen Essay thematisieren will. Es sei undenkbar, so Zweig, „etwas so Persönliches wie innere Freiheit auf andere Menschen und gar auf Massen übertragen“ zu wollen. Er verweigert sich also davor, diese Idee der „Freiheit“ politisch zu verstehen, als eine Ideologie, und dies gerade in einer Zeit, in der ein Krieg im Namen der Freiheit geführt wurde. Zweigs Idee ist vielmehr die Freiheit, die allein durch das Leben einer Person verwirklicht werden kann, die von jedem Fanatismus und jeglicher Ideologie befreit ist. Der Text des *Montaigne*-Essays verkörpert selber diese persönliche Eigenschaft der „inneren Freiheit“ dadurch, dass er das Leben Montaignes (und indirekt auch Zweigs) mehrfach persönlich darstellt.

Aber dieses Montaigne-Bild oder die mit ihm verbundene Freiheitsidee ist im Essay keineswegs ein starrer, unbeweglicher Gegenstand. Wie Montaigne seine *Essais* immer wieder bis zu seinem Tode erneut editierte, um sein sich stets wandelndes erzählendes Subjekt auszudrücken, so trägt auch Zweigs *Montaigne*-Essay diese Dynamik der Selbstdarstellung in sich. Alleine schon inhaltlich ist der Essay alles andere als stabil, da er die betreffende Idee durch den Lebenslauf eines Menschen zu zeigen versucht. Dank dieser Form wird die Idee der Freiheit in der geschichtlichen Dynamik

dargestellt, und diese Geschichte der Ideenentwicklung steht wiederum in einem engen Zusammenhang mit der Lebensgeschichte Zweigs, der sich sein ganzes Leben hindurch mit der Freiheitsidee beschäftigt hat.

Auch in einem anderen Sinne kann man das Werk dynamisch nennen, nämlich im Sinne der Dynamik der Textentstehung. Den *Montaigne*-Essay hat Zweig als das unvollendete Typoskript mit handschriftlichen Korrekturen und Ergänzungen (französische Zitate aus *Essais* sowie Ergänzungen und Notizen auf Deutsch) hinterlassen. Die zwei Herausgeber dieses Textes, Richard Friedenthal (in: *Europäisches Erbe*, 1960) und Knut Beck (in: *Zeiten und Schicksale*, Gesammelte Werke in Einzelbänden, 1990), haben jeweils nach ganz verschiedenen Richtlinien gearbeitet. Friedenthal hat die handschriftlichen Korrekturen nach seinem Ermessen teilweise aufgenommen. Beck hat dagegen die gesamten handschriftlichen Korrekturen außer Acht gelassen. So sind die zwei Ausgaben gänzlich unterschiedlich und doch weichen beide vom originalen Typoskript ab. Es ist eigentlich die identische Situation wie bei Montaignes *Essais*, denn es gibt wegen der mehrmaligen Bearbeitungen des Autors auch hiervon mehrere Versionen, und oft sind die Unterschiede zwischen ihnen bemerkenswert bezüglich der Interpretation dieser Selbstdarstellung. Das Gleiche kann man über den *Montaigne*-Essay von Zweig konstatieren: Man sollte nicht eine der drei Versionen als einzig authentische behandeln, sondern auf die Unterschiede zwischen ihnen achten, weil sich gerade dort die sich entwickelnden Gedanken verbergen, das einen Blick auf das sich stets verändernde Ich zulässt.

Im Aufsatz werden zwei Stellen als Beispiele analysiert. Die erste Stelle handelt von den verschiedenen Arten der „Freiheit“. Die Friedenthal-Ausgabe ermöglicht durch die Aufnahme einiger handschriftlicher Ergänzungen, und zwar die Erwähnung von „Schicksal“ und „Tod“, das Entdecken der Tatsache, dass Zweig hier nicht nur an die Befreiung von den irdischen Verbindungen denkt, sondern auch an die Freiheit als die wesentliche Grundlage des Lebens, sogar die Freiheit zum Tode. Das originale Typoskript belegt diese Aussage noch deutlicher, indem es ein Zitat aus *Essais* über die Freiheit des Todes enthält, das in die beiden Buchausgaben nicht aufgenommen wurde. Die zweite Stelle erzählt von der Abreise des alten Montaigne, der den Tod in der Fremde nicht scheut. Doch der Unterschied zwischen den Ausgaben bringt ans Licht, dass Zweig das Zitat von Montaigne erst später eingeschoben hat. Das Wesentliche an dieser Stelle war zuvor schon geschrieben, und zwar die Bereitschaft eines Kosmopoliten zum Tod in der Fremde. Diese Beispiele zeigen, dass gerade die Entwicklung des Textes, die sich im Typoskript nachvollziehen lässt, die letzten Gedanken und Gefühle des Autors klar reflektiert und man deshalb *Montaigne* nicht als ein stabiles Werk, sondern als eine dynamische Selbstdarstellung betrachten und interpretieren sollte.

Eine solche dynamische Selbstdarstellung ist stets interaktiv; die Beschreibung des Ich gleicht nie ganz dem Ich selbst. Dieser Unterschied fordert nicht nur die unendliche Erneuerung des

selbstdarstellerischen Textes, sondern bewirkt auch auf der Seite des beschriebenen Ich eine Veränderung. In diesem Sinne war der Versuch Zweigs, sich durch die Biographie Montaignes darzustellen, nicht ohne Gefahr, als er das Wort Montaignes wiederholte: „La plus volontaire mort est la plus belle“. Wie auch Montaignes *Essais* konnte Zweigs *Montaigne*-Essay nicht vollendet werden, denn die sich stets entwickelnde interaktive Selbstdarstellung ist ein endloser Prozess, dessen Dynamik keinen anderen Endpunkt als den Tod des Autors selbst kennt.